

陳舜臣さんを語る会通信

NO.40 Jun. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年6月15日

明朝末期の中国と秀吉から家康の時代の日本が舞台

陳元賛(1587-1671)を主人公に、小説の醍醐味を満喫させてくれる『珊瑚の枕』

〔新潮文庫版『珊瑚の枕』キャッチコピーより〕

上巻 時は明末期、人生に悩む青年陳元賛は、日本からの修行僧慈円の誘いで少林寺を脱走し、大富豪馬哈散の頼みで、幻の財宝を求め、日本に渡って来る。しかし、その彼を待ち受けていたのは、慈円の怪死、突然の襲撃、謎の殺人など、怪奇な事件の連続だった。乱世の余燼残る徳川時代初期を舞台に、日本に少林寺の柔術を伝えた陳元賛の波乱に富んだ運命をスリリングに描く歴史ロマン。

下巻 かつて戦乱の時代に、日本にユートピアを築こうという壮大な夢があった。夢の実現のために、馬哈散の先代が、武将黒田官兵衛、政商島井宗室らに託した財宝。しかし、徳川幕府の成立で、その夢も実現しないまま、財宝は日本のどこかに眠ってし

まった。そして四十年後、幻の財宝を求めてさまざまな野望家が動き出す。巻き込まれた陳元賛の運命は？最後に勝つ者は誰か？

初出は、1980年6月24日～81年4月11日、山陽新聞朝刊連載です。地方紙数社が掲載したと思われます。

単行本では新潮社(1982年)、中央公論社(1996年)の二つがあり、他に、新潮文庫版(1985年)があります。

(編集委員 橘雄三)

新潮社版単行本表紙→



『珊瑚の枕』

文庫版「あとがき」全文
傍線は編集委員の加筆

陳元賛、通称五官は、

実在の人物であるが、彼を主人公にしたこの小説は、あくまでもフィクションである。彼に『珊瑚の枕』という著書があった。明

国にいた時期の作品だが、彼の話によれば、何者かに盗まれてしまったとい

う。この著書は、したがって、幻の本であり、そこ

になにが書かれていたのか一切わからない。この本

が失われたために、故国にいた時期の彼の経歴が

わからなくなっている。

この小説に『珊瑚の枕』という題をつけたのは、

幻の本のタイトルをかり、作者が想像をふくらませ

て、彼の空白時代をフィクションで埋めてみる、

という気持ちであらわしたものである。

ただし、陳五官が若いころ少林寺で修行したこ

と、三十歳前後で日本に渡ったこと、尾州藩に仕

え、当時の文人たちと詩文の応酬をしたこと、少



陳元賛

林寺の武芸を伝えたこと、茶道や陶芸など生活芸術を日本に紹介したことなどは事実である。

陳五官のあとに、僧隠元や朱舜水など、日本史上でも著名な人物が渡来

した。隠元は宇治に万福寺を造営し、日本黄檗宗

の祖となり、朱舜水は徳川光圀に師と仰がれ、

「嗚呼忠臣楠子之墓」の墓誌を撰したりして、

どちらも脚光を浴びた。五官はこの二人

ほどのなばなしではないが、彼の伝え

たものは、日本の土にすっかりなじんで

おり、その業績は忘れてはならないとおもう。筆を舞わせて、

彼の著書名と姓名とをかり、その時代の

雰囲気を読み取った。描いてみようとした。

私の作品に、これ

につづく時代を舞台



にしたものが数篇あり、十七世紀の東アジアは、私にとつて、なんども耕してみたい気持ちをおこさせる土壌である。

(昭和五十七年二月)

補足1 ■傍線最後の箇所、十七世紀の東アジアを舞台にした陳舜臣さんの小説と言え、『風よ雲よ』『旋風に告げよ』『琉球の風』などが思い浮かびます。

補足2 ■陳元賛の墓左の画像。現在、名古屋の平和公園内にあります。
soutairoku.comより

『珊瑚の枕』 主な登場人物と各章の要約

主な登場人物

- 陳元賛(ちんげんぴん) 通称五官。主人公。少林寺で修行中に慈円に誘われ密かに退山(逃亡)。ある事件に巻きこまれ日本へ。中国の詩、茶道、陶芸、殊に少林寺拳法を紹介したことで有名。
- 慈円(じえん) 日本人。日本名は山中重左衛門。有名な大名の子だが密かに明国に遣られていた。ある事件の重要な鍵を握っている。
- 馬哈散(ばはさん) 揚州の大富豪。イスラム教徒というが実は三教徒。
- 玉燕(ぎよくえん) 馬哈散の孫娘。誘拐され、慈円に救い出される。来日のメンバー。
- 邯鄲先生(かんたんせんせい) ペルシャ人の奇術師で、超一流の幻術をつかう。遅れて来日。
- 洛女(らくじょ) 邯鄲先生の娘。父に劣らない幻術を使う。来日のメンバー。
- リン マカオ生まれ。父はイギリス人、母は中国人。イギリス客船の料理番。
- 島根現八 筑前の郷土島根彦十郎のせがれ。少林寺拳法の弟子にしてくれと陳五官を訪ね、以後、五官と同道。慈円についての情報を持つ。
- 黒田官兵衛 黒田藩の始祖。秀吉の謀臣として活躍、豊前十二万二千石の大名となる。隠居して如水と称した。
- 島井宗室(しまいそうしつ) 博多の豪商。
- 島井楽庵(しまいらくあん) 宗室から全てを任されていた番頭。財宝捜しに大きくかわる。
- 伊三郎 楽庵の手足となつて情報収集。実は末次平蔵(すえつぐへいぞう) 長崎の大貿易商。先代は興善。

- 村山東庵(むらやまとうあん) 末次興善に身を寄せているとき、秀吉をもてなし、氣に入られ、大分限者になつていく。
- 村山三郎 東庵の三男。切支丹禁制になつても棄教せず、マニラに流される。東庵は国禁を犯してまでして三郎を連れ戻す。これが、末次との訴訟合戦で命取りとなる。
- 玄界散仙(げんかいさんせん) 本名は頼桑堂。中国人を父に、日本人を母に持つ画家。
- 長門屋久兵衛(ながとやきゆうべえ) 江戸の材木商。島井楽庵と親しい。
- 康善(こうぜん) 明国から渡来した僧。長門屋の敷地内に草庵を結んでいるが、実は、日本にいる三教徒の代表。
- 尾形宗柏(おがたそうはく) 日本一の呉服屋雁金屋の当主。母は本阿弥光悦の姉。京都の鷹ヶ峯に住む。孫の代に日本芸術至上の巨人、光琳、乾山がでる。
- 本阿弥光悦(ほんあみこうえつ) 茶、書、陶芸などにすぐれ、のちに芸術の神様とまであがめられる。徳川家康から京都・鷹ヶ峯を拝領、一族郎党で移り住み芸術村を営む。
- 石川丈山(いしかわじょうざん) 孫助。江戸時代初期を代表する漢詩人。徳川幕府陣営で財宝捜しにかかわる。



新潮文庫版(上)表紙

『珊瑚の枕』 各章の要約

先入観なしに読みたいと思われる方は「要約」は無視して下さい

巻	章	内 容
上	風雲少林寺	陳元賛(通称五官)は、少林寺での修行が1年経った頃、先輩の慈円(山中重左衛門)に誘われ「退山」(逃亡)する。この日、偶然にも、徐省という「退山」者がもう一人いて、共に行動する
風雲少林寺	雲の上	それから一ヶ月、徐省は、皇太子(万暦帝の長男)暗殺計画の実行者として紫禁城にいた。重病の母の高価な特効薬を買うため、大富豪劉昌に身を売り、特命を帯びての行動であった。しかし、直前、任務を放棄する
	揚州の夏	陳五官は少林寺の「白衣の劉」の追跡を撒きながら、約束の揚州で慈円と落ち合う。慈円は旧知のイスラム教徒の大富豪馬哈散の頼みで、劉昌に捕われている馬哈散の孫娘・玉燕と徐省の母親を救出していた
	天方楼	天方楼とは馬哈散の邸の通称。慈円の帰国、陳五官らの渡日の話が出る。この仕事・任務には馬哈散が大きくかわっている。日本では、大坂夏の陣で豊臣氏が滅び、徳川幕府が確立していた日本が、まだ、群雄割拠の時代、馬哈散の父親には、深い信頼関係で結ばれた日本商人がいた。その日本商人は、馬哈散の父に、ある人物に天下を取らせる軍資金として、巨額の資金援助を要請し、馬哈散の父は、それに応えたという。しかし、天下取りレースは期待通りには進まず、日本へ運んだ金は、使うことなく終わってしまった。慈円がその財宝について、情報を持っているという
	かいさいせつ 開斎節	開斎節とは、イスラム教の断食月明けの三日間をいう。馬哈散が天方楼の庭で催す開斎節の余興に呼んだ奇術師一座の邯鄲先生とその娘・洛女が、時期は異なるが渡日、財宝捜しに絡む
	到着	揚州の大富豪劉昌は、宮廷の宦官である弟の威光を笠に着て、強引なことをやり、土地の人に嫌われていた。先の皇太子暗殺計画では、劉昌の弟も関与し、実行犯送り込みの張本人は劉昌であった
	再起	1616年(小松原藩『陳元賛の研究』では1619年)、五官たちは幾組かに分かれ日本到着。五官はアモイからイギリス商船で平戸着。船中、料理番のリンと親しくなる。平戸では、約束の慈円の迎えはなく、やむなく、海賊の大頭目顔思斉(がんしせい)の世話になる。顔思斉から慈円の死を告げられる。病死だという。日をおかず、五官も同じような症状で瀕死の床に
	復讐の宿	五官、二ヶ月病床にあってやっと助かる。島根現八と名のる者が、弟子にしてくれと顔思斉邸に現れる。五官のことは山中(慈円)から聞いたという
		陳五官は散歩に出たところを数人の賊に拉致され、裸でガラス牢に閉じ込められる。「うぬが殺した杉田英二郎の父親」と名のる老人と、英二郎の弟二人、それに、少林寺の白衣の者まで絡んでいるよう

『珊瑚の枕』各章の要約(続) 先入観なしに読みたいと思われる方は「要約」は無視して下さい

	雲は飛ぶ	五官はチャンスを捕らえ、脱出を試みる。しかし、少し遅れて、五官を連れ出そうと侵入してきたらしい三人組の黒装束と杉田一家の争いとなる。事態は輻輳してくるが、とにかく、五官は脱出できる
	博多	博多の政商島井宗室は、すべてを島井の知恵袋である番頭の楽庵に託し、昨年死んだ。一室で、楽庵は秘書の伊三郎と向き合っている。伊三郎は徳川の隠密だが、楽庵はまだ気づいていない 伊三郎は調査結果、①黒装束の一味が本当に連れ出したかったのは、イギリス船の料理番リンだったこと、②末次平蔵と村山東庵、特に東庵の経歴・情報などを楽庵に報告する。ところで、末次と村山は訴訟合戦の最中で、末次は分が悪く、楽庵に助けを求めてきていた。ここに、徳川幕府の切支丹禁制が絡んでくる 村山東庵のアキレス腱は切支丹信仰を捨てきれない三男三郎の存在。幕府は、ころばぬ切支丹をマニラやマカオに流したが、その中に三郎が入っていた。東庵は三郎を帰国させる手を打ったが……。このことに、イギリス船の料理番リンやイギリス東インド会社の仕事をしている杉田英二郎らがかかわってくる
	水の如き夢	黒田如水(官兵衛)は、秀吉が病床についたころ、島井宗室に、「天下を取るときのために、軍資金を都合していただきたい」と言った。二人は共に切支丹で、宗室は、如水の作る国に夢を託した 如水は、天下分け目の戦い、東西共倒れを期待したが、皮肉にも、息子黒田長政の活躍もあり、東軍の圧勝で、軍資金の使いどころなく終わる。如水は、九州一円を支配下に置いたに留まった。ところで、軍資金について、島井の呼びかけに、馬哈散は大金を持って来日、自ら財宝隠しにかかわったという
	玄界散仙	リンは五官を博多の玄界散仙のところに連れて行った。玄界散仙の父は、主人馬哈散の命で、兄と共に来日、財宝の行方を探したよう。ところで、玄界散仙は代々、マニ教徒であるらしい。それに、馬哈散も
下 幻 夢 秘 宝 伝	飯倉坂	玉燕とリンは、江戸三田の飯倉坂近く、材木商長門屋に世話になっている。長門屋には、ほかに、康善という明国渡来の僧がいた。リンは、末次・村山訴訟の証人として大切な身柄である。訴訟は、リンの他、村山三郎大阪城入りの証人も現れ、末次の勝利に終わる。村山東庵処刑
	左馬之助	慈円(山中重左衛門)の本名は、真田左馬之助(真田昌幸の子)と知れる。慈円は死ぬ前、一枚の絵を杉田英二郎に託していたことがわかる。洛女が五官の所に江戸行きの指令を持ってやってくる
	残夢	五官は洛女の「江戸へ行くのよ」という命令口調が胸に突き立つ。命令されたとおりのことをする、それだけで自分の持っている歳月を磨り減らしたくない。五官は、「私にも都合がある」「京都へ行く」と言い切る 場面は少林寺。慈雲大師と白衣の者たちの会話。白衣の者たちは、杉田英二郎が、慈円から託された絵を持って訪れたのは、京の雁金屋であることを突き止めていた。そして、会話中、洛女と邯鄲先生が少林寺に繋がるものであることが明かされる。一方、陳五官も杉田の訪問先が雁金屋だと確信する
	たかがみね鷹ヶ峯	五官は島根現八の案内で洛北鷹ヶ峰へ来ていた。本阿弥光悦が徳川家康からこの土地をもらい受けた経緯から、芸術村づくりまでが詳述される。五官は、雁金屋宗柏、ついで光悦に会い、慈円(真田左馬之助)が託し、杉田が持参した絵を返してほしいと頼み込む。しかし、光悦は、あの絵は「江戸へ送りました」と答える
	江戸の春	長門屋の奥座敷。久兵衛は元旦の宴に、特に親しい客、十数人を招いていた。五官もいた。この席で、玉燕が胡旋舞を舞った。この舞には、伎楽面を付け楽器を奏でる人物が加わっていた。玉燕の舞が終わったところへ、石川丈山という客が遅れて入ってくる
	大雲光明堂	五官は康善の呼び出しで、外神田の大雲光明堂で落ち合う。康善は馬哈散に連なる者で、マニ教徒に違いない。康善は、「石川孫助(丈山)には注意しなければならんぞ」という。丈山は徳川のまわし者か 康善は近づく敵を察知、気絶させる。伊三郎であった。康善は、伊三郎は徳川の密偵だという
	赤い羽織	五官は、赤い羽織を着た飴売りになり伊三郎を尾行、富樫という邸に忍び込む。そこに居たのは伊三郎、頭巾の男、それに洛女であった。頭巾の男は？三人の関係は？洛女は敵なのか？
	海の見える家	江戸の町、海の見える二階の一室。洛女と五官を前に康善の口から、洛女と玉燕の驚きの素性・事実が話される。洛女は、すでに、邯鄲先生の陰謀に引き込まれていた 財宝の秘匿場所は、もと、一幅の絵で示されていたのを何枚かに分けたという。財宝を巡り、いくつもの勢力が争っている。徳川幕府では、江戸は服部半蔵が主宰し、地方は石川孫助が動いていた
	東林党	明末の政治状況が詳述される。政治に批判的な集団の拠点になっていたのが無錫の東林書院で、その勢力を東林党と呼んだ。邯鄲先生は東林書院の組織力に目をつけ、その領袖高攀竜に接近する
	流星	邯鄲先生、来日。山伏すがたで、「大宿邯鄲」と号し、博多にあらわれる。根城は海産物問屋「対馬屋」。島井楽庵、邯鄲先生に祈祷を頼む。一方、楽庵、伊三郎の正体に気づく 島井宗室は、庭に書庫を建て、読書室の壁に流れ星の絵を描かせていた。絵を描いたのは先代の玄界散仙とのこと。島井の当主、神谷信吉の話では、伊三郎の紹介で石川という人が漢籍を借りたいと来訪、この絵に興味を示したという。楽庵は、この絵の流れ星は財宝の秘匿場所をあらわすのではと考える
	沖つ鳥	博多は商家風の家の一室。康善、玄界散仙、陳五官、玉燕の四人がいた。揚州の馬哈散の先代が、「神の嘉(よみ)したもう国をつくる資金として、その候補地に莫大な財宝をもちこみ、自分とわが子の二代にて、もしそれを用いることができなければ、そのまま眠らせよ」といったという 宝探しには二つの陣営があって、こちらの大將は康善。彼は揚州の馬哈散の代理人である 座の余興に玉燕が舞う。玉燕の衣裳は日本の着物で、先代の馬哈散が日本で作らせたという。着物には、帯の下、紺地のところに小さな白い鳥「沖つ鳥」が見えた 対馬屋の一室、邯鄲先生を大將とする陣営。伊三郎、石川孫助、洛女も居る。この陣営には、少林寺、東林党、そして徳川幕府の力まで絡んでいる。先代馬哈散の宝隠しには、五島の汪直くずれが絡んでいることを掴む
	五色の竜	大宿邯鄲の祈祷が、博多湾の船上で行われる。洛女、島井の当主信吉、楽庵、伊三郎が同船している。祈祷が始まり、やがて、五色の竜が次々現れ、絡み合い、躍動する
	天の幕	いよいよ大詰め
	後日譚	尾張名所図会陳元賛遇居の図→ 康善は台湾に理想の国を実現しようとする



珊瑚の枕

辰巳一平氏

に美術を伝え
えたい。舞台は徳川初期の日本
に美術を伝え
えたい。舞台は徳川初期の日本
に美術を伝え
えたい。舞台は徳川初期の日本

戦国末期から徳川初期に至る一世紀は、波乱に富んだ時代であるとともに経済も活況を呈し、一方では東洋、西洋史との密接なつながりをもった時代ともいえる。このような時代に、明国生まれの陳元寶が王朝交代の乱を避けて来航し、江戸に居をかまえて拳(けん)法を伝える。詩人陶工としても優れた元寶は尾張藩に遇され、帰化人として寛文十一年に没する。戦国絵巻から徳川体制へ移る時代相をつぶさに見つめた陳元寶の迷いの行跡をたどる一大ロマンである。陳氏は大正十三年神戸生まれ、国籍は中国だが、生粋の「神戸っ子」。大阪外語卒。昭和三十六年「枯草の根」で江戸川乱歩賞、昭和四十三年「青玉獅子香炉」で直木賞を受賞。つづいて「玉領よふたたび」「孔雀の道」で日本推理作家協会賞を受けた。おもな作品に「阿片戦争」「旋風に告げよ」などがある。辰巳氏は昭和十年東京生まれ。多摩美大卒業後、佐藤泰治画伯に師事し、切絵の技法を導入して独特の画風を完成している。

[illegible][illegible]

作品の「あとがき」で陳さんは、「彼の著書名と姓名とをかり、その時代の雰囲気^{ふんいき}を気ままに描いてみようとした」とおっしゃっているとおり、作品の一番の狙いは、主人公陳元賛の活躍ではなく、時代の雰囲気^{ふんいき}の描写なのです。従って、中国にあっては、明朝末期の政治状況、例えば、皇位継承争いや東林・非東林の争い、更に食菜事魔^{しょくさいじま}(マニ教徒)に対する弾圧など、また、日本にあっては、関ヶ原前後の東西両陣営、鷹ヶ峰の芸術村などの記述、末次・村山両豪商の訴訟合戦などに紙幅が割かれます。